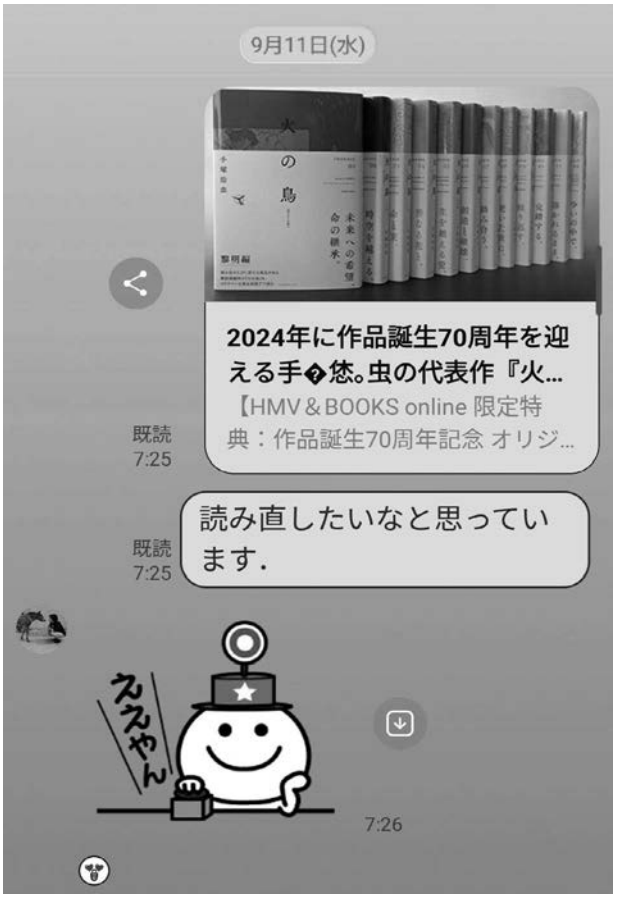
"A phoenix never dies."
「火の鳥は死ぬことがない」

苫小牧市医師会
王子総合病院
池田（いけだ）　篤（あつし）

2017年９月第1188号の‘会員のひろば’に投稿依頼を受けて早８年。帯広厚生病院から北海道大学病院を経て、現在は王子総合病院で変わらず消化器外科医として勤務している。前回は美容院選びに苦労している話を投稿したが、転勤が続いてしまい、残念ながら、いまだにお気に入りの美容院は見つかっていない。単身赴任なのも変わりないが、家族も自分も少しずつその生活に慣れてきてはいる。この８年間で手術環境は激変し、腹腔鏡下手術からロボット手術にその中心は変わった。初老を過ぎ、ミドル世代と呼ばれるこの年齢になっても、新しい手技や新しい手術を身に着け、さらに指導ができるのはとてもありがたい。またロボット手術は指導という立場、気苦労はあっても肉体的な疲労度では圧倒的に優れており、外科医寿命を延ばしてくれていると感じる。今後はダヴィンチだけでなく、チャンスがあれば国産のhinotori™なども操作してみたいと思っている。

昨年は、天災や事故、戦争などで多くの貴い命が犠牲となる悲しいニュースが多く、個人的にも胸が詰まる思いをした。あとから考えると‘嗚咽’とはこんなに苦しいものだと初めて知った。生きることとは、死ぬこととは。答えを見つけ出すのは‘まだできないんだろうな’と思いながら、ぼんやりとネットサーフィンをしていたところ、以前読んだことのある漫画が再版されるという記事に出合った。その作者は、私が新年早々気胸で入院し、浪人を覚悟して記念受験をしようと思っていた受験勉強の真っ只中、平成になったばかりの２月に亡くなった。‘緊張しい’だった私にとって記念受験という気楽さは、リラックスできたのか諦めが効いたのか、その４月から医学生として広島から上京して単身生活を始めることができた。その後、改めて作者について調べると、享年60歳、胃がんが原因だと知った。ジャングル大帝で育った幼少期、医師を目指している自分としては‘火の鳥’を一度読んでみたいと思っていた。コツコツと買い揃えたハードカバーの‘火の鳥’12巻、読み切って感じたはずの‘生きることとは’、‘死ぬこととは’の当時の答えはほとんど思い出せないが、成人式を迎えたばかりの当時の私は、生と死についてそれほど真剣に考えて読んではいなかったと思う。ただ、お茶の水博士と同じような特徴的な鼻を持つ登場人物は鮮明に覚えている。明るく聡明な博士とは全く異なり、どこか悲しく人間の暗い闇の部分を見ているように感じた。なんとか医師になり、外科医として様々な施設で修練するための転勤が続くと、とてつもなく重い医学書と一緒に引っ越しする12巻は、さらに重い荷物となってしまい、いつかの時点で古本屋に売ってしまったが、今はとても後悔している。

‘嗚咽’から２週間余り、再版の記事が忘れられず妻にLINEで相談したところ、二つ返事で‘OK’をもらい、老眼にもやさしいＢ５版を大人買いした。改めて時間をかけて何度も何度も読み直した。答えが書いていないことは分かっている。しかし、その長い物語の中で‘生と死’について、そして何のために生きているのか、今何をするべきかを考えるチャンスをもらった。ロボット手術で外科医寿命は延長したが、身体の寿命はいつ終わりを迎えるかはわからない。今週も早く家に帰って定番料理でもつくろう。そういえば、ホンマでっか!?TVで、良い隠し事はワクワクすることが脳や体に良くって寿命が延びるって言っていたな。娘二人のために、グミかラムネかセイコーマートのミニチョコクロワッサンでも買って帰ろうかな。家族を今まで以上に大切にしよう。

70年も昔の作品ですが、今読んでもまだ先の未来を見ているような命のお話です。お勧めです。